

燕石
十種
新
吉原畧說

附玉菊考

三輯

七

150
679
27



679
27

新吉原畧説



今の吉原を新吉原とつゝるは元吉原と向へてつゝる所之
 此れは古名を千束村と上千束は今の龍泉寺所之千束は
吉原是形下千束は田圃慶喜寺
 元吉原は元和三年丁巳三月より始まつて全く形れるを
 寛永三年丙寅十月形り其後明暦二年丙申の初火を
 受りて元和三年は是は
元和十年形り大石町の榎原栄いふをまめ形く
 日々月々につゞきあつて形るるまふかめは形り所
 の市井は何れも形るる重きもの作をあらうて寛永
 十月和野作出た其代りては海蔵寺の形り所
 形り日本堤の造りた地をぶらり引料金志方ある

下一王^三王^四山^五間^六全^七拾^八元^九吉^十原^{十一}廟^{十二}二^{十三}下^{十四}方^{十五}形^{十六}一^{十七}を
 今^{十八}度^{十九}を^{二十}其^{二十一}五^{二十二}割^{二十三}語^{二十四}少^{二十五}二^{二十六}下^{二十七}三^{二十八}下^{二十九}の^{三十}地^{三十一}を^{三十二}下^{三十三}さ^{三十四}れ^{三十五}た^{三十六}く^{三十七}さ^{三十八}れ^{三十九}を
 田^{四十}井^{四十一}の^{四十二}形^{四十三}を^{四十四}築^{四十五}之^{四十六}家^{四十七}居^{四十八}造^{四十九}之^{五十}事^{五十一}始^{五十二}見^{五十三}せ^{五十四}一^{五十五}と^{五十六}云^{五十七}三
 年^{五十八}丁^{五十九}酉^{六十}四^{六十一}月^{六十二}十^{六十三}八^{六十四}日^{六十五}の^{六十六}五^{六十七}形^{六十八}を^{六十九}大^{七十}風^{七十一}志^{七十二}き^{七十三}く^{七十四}一^{七十五}吹^{七十六}起^{七十七}り^{七十八}未^{七十九}の^{八十}別^{八十一}計^{八十二}り
 の^{八十三}五^{八十四}形^{八十五}を^{八十六}本^{八十七}に^{八十八}九^{八十九}山^{九十}形^{九十一}を^{九十二}本^{九十三}の^{九十四}寺^{九十五}の^{九十六}火^{九十七}火^{九十八}入^{九十九}出^{一百}と^{一百一}云^{一百二}と^{一百三}云^{一百四}を^{一百五}焼^{一百六}ひ
 所^{一百七}出^{一百八}り^{一百九}て^{二百}本^{二百一}に^{二百二}大^{二百三}火^{二百四}と^{二百五}焼^{二百六}く^{二百七}一^{二百八}が^{二百九}元^{三百}吉^{三百一}原^{三百二}と^{三百三}云^{三百四}火^{三百五}火^{三百六}と^{三百七}形^{三百八}す
 形^{三百九}く^{四百}焼^{四百一}七^{四百二}せ^{四百三}く^{四百四}より^{四百五}て^{四百六}日^{四百七}本^{四百八}堤^{四百九}引^{五百}徒^{五百一}り^{五百二}の^{五百三}事^{五百四}も^{五百五}姑^{五百六}々^{五百七}其^{五百八}の^{五百九}左^{六百}や
 三^{六百一}の^{六百二}事^{六百三}全^{六百四}年^{六百五}六^{六百六}月^{六百七}の^{六百八}初^{六百九}急^{七百}の^{七百一}代^{七百二}也^{七百三}悉^{七百四}く^{七百五}引^{七百六}徒^{七百七}る^{七百八}事^{七百九}也
 所^{八百}と^{八百一}云^{八百二}志^{八百三}の^{八百四}形^{八百五}を^{八百六}其^{八百七}家^{八百八}作^{八百九}形^{九百}く^{九百一}終^{九百二}へ^{九百三}ん^{九百四}中^{九百五}其^{九百六}邊^{九百七}今^{九百八}も^{九百九}お
 山^{一千}の^{一千一}宿^{一千二}お^{一千三}多^{一千四}越^{一千五}の^{一千六}あ^{一千七}ら^{一千八}く^{一千九}少^{二千}く^{二千一}而^{二千二}修^{二千三}の^{二千四}家^{二千五}に^{二千六}お^{二千七}對^{二千八}して^{二千九}階^{三千}屋^{三千一}つ^{三千二}く^{三千三}高
 木^{三千四}賣^{三千五}を^{三千六}已^{三千七}ら^{三千八}ま^{三千九}り^{四千}せ^{四千一}の^{四千二}事^{四千三}有^{四千四}り^{四千五}れ^{四千六}の^{四千七}元^{四千八}吉^{四千九}原^{五千}の^{五千一}形^{五千二}を^{五千三}焼^{五千四}く^{五千五}は^{五千六}

山川引^一られ^二り^三
此時山岳あり階屋志をみる人々の住居の是れ
 移りて後と晝夜所然一有あり
 今北女の片志ありいかに
 此皇のうら其原に戸所中二百餘あり一風呂屋現
 定然く其原を思ふ天正九年の比伊勢と市を以て一りの錢瓶
 橋の是れなりせんや風呂を一つたり風呂の形も亦第一の形なり
 此の形の形を以ていふなり今も所あり風呂ありやと云
 禁止せられたり一形をさて此山岳の地に住居するを山岳通
 ひやつてつられし形偏笠をうとむる扇を自鼻の何て形を
 して形を以て其原に於て有る一さの田所又ハ五十百
 左の茶室明和の天保五十年左の比側十軒に右若くは左の比側
 ありし今も細名能偏笠茶室の部あり
 を釣^一り^二置^三は^四る^五是^六を^七う^八わ^九り^十て^{十一}廟^{十二}中^{十三}入^{十四}る^{十五}形^{十六}く^{十七}
其比は偏笠
 笠や云茶室

少て標形を押し方偏をばはらうと是れを記す考の面をわらう
名先のこころは唐の客を茶屋船宿す柳灯を提て幕内すれきの
柳灯を寄す中れは唐の客を柳灯形をいへば偏を記すにけり
茶屋の客を寄す中れは唐の客を柳灯形をいへば偏を記すにけり
明和のころは唐の客を柳灯形をいへば偏を記すにけり
若人等白柄の刀白草袴
白き馬のうらむを往來のまをせし書時所より山若の
駐信所附日本橋より大門まで並に駐信所二百又馬奴二人を
ろふしうたやえうり白馬駐信所四方四十丈形や志うたう
又明暦の七歌の春の日のついでに白馬を柳たをらきたれ
そ白き馬のうらむを往來のまをせし書時所より山若の
語をす身たわらむこい白馬驕不行章お今河津寺の鏡
内馬名をうら名のあらし山若馬を一通ひころ存すころ
かろて空年八月の初新吉原の家を出てきふりけり河津も

廊中引福うこ家く此物高貴をいふ形にうらに所き
丁酉冬二月京所二月冬二月自國所うの五馬元吉原より
五馬形志を其所々の半さうりさきを記すにけり
一揚をのこを今一柳福一の別揚を所せつをを記すにけり
堀所せつを實又八年戊申三月江戸端々有茶屋社女
持七十余人のちのえり往來の形依見所堀所出来り
時亦た新屋を作りて依見所を名づく其故此所を
寄多く生玉依見のちの形を我もて形新所せつを
京所二月のちのちの往來の形依見所堀所出来り
大寺の西河原揚を所り羅城門河原新馬自所のり
天神河原水た馬待合の辻たて馬きう月自の角をいふ昔

不形なるを 青市向 浦舟の水石瓦 世に感舟云云此中瓦
りて形り 附合きてむらさき形り 昔大門の口の傍に一株の松ありしれ
をうごづけの松とつえり思や松の木の本まをわづ
このり来りてつとをきりしをよて其香をやくて志る所形
多矣 大門より内医師の外を常葉松と云入るを今を此松の
形りされさる披著のうきと志る形り
少めたる志る所の形り その度この松をよ水からの所やつら
ん昔の家作りよりそのを思や明和五年戊子四月五日積
七のまへまでをに石所、巴屋とつら松女屋ありし 宝曆
の初年
十二軒燈堂のわらわちやうし 掛の文句に終る松自の巴をよとん豊
山中のつらを即ち巴屋のよと形わの初の家形なりたし
此の家 のこいふの松女屋と異なりて至て席お形を見世つぎ
少てありし其比より大上徳を天満屋形と云わし見世の

ろ拵天井のまへ 光りて美し 巴屋は松押をて付たる見
せの 一丸も常侍の障子をわぬ松子の外の方三本の松子
戸のむらさき者其半に及人形と入らせまゝ奥へ
ちんちん園を紋と形を短き暗蓋と云へあり見世の正面に
差燈一ち七寸まわりの黒き三本の紋を額の中へ掛置
たりしは左風形なり世形りさる人云し 昔をすへて
の如く形り あり 中の所の茶をの二階に明和燈を
まへまてを松松子形 二階を初拂ひとらる楊をわりの
限水石をやを志るを明和以後たひ の火袋をて初節り
家作り花袋少形 形あり 掛するは披燈又の家作りは
後ホ法華あり松松子形は初節り
このおのり急度お守別三階侍の家作り不仕全銀に松附全減金うおお
お守用と志る申す但家作り三階侍に等し花袋早とおお高サを又り人

に限甚余高キ分迄々修儀に居る身一可申せ居るとれを故々
番思ひて大に作らまうと一室をありしを思ふれとて今この
定ぬ形うとて今焼亡の度無に修定して他亦借屋にて
高敷すらしを山若の修定お始りて今も甚度過半の積
てもありれとて他亦出らざるを思ひ此のう一を定室四年
丙辰十二月七日焼亡とて近年焼亡りれや修定のは解一と方
年あり焼亡とてこれと此時を廊中へ修定をまうとて北
寄を逐へて一 同房借屋にたつてお修定したる其室六年吉原野焼
家より客ありれを居るとして一 志めりて明和の焼亡り廊中焼
解一たりやとて一 志めりて明和の焼亡り廊中焼
解く焼亡りて此時山若々々々々々々々々々々々々々々々々々
思ふにこれとての焼亡りて此の焼亡りて此の焼亡りて此の焼
やとて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一
一此房を焼亡りて此の焼亡りて此の焼亡りて此の焼亡りて

志めりてありれとて他亦の修定を元私の形うとて公の修定あり
何とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一
焼亡りて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一
元とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一
文政七年甲申四月三日焼亡りて此の焼亡りて此の焼亡りて
去つて同元銅分や右の全三月十日ありて此の焼亡りて此の焼
ひ高敷とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一
廊中の修女見世をまうとて今もすめりて三法に焼亡り
昔も中明形やうたひつれとて一とて一とて一とて一とて一とて一
とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一
葉うとて茶とて銀うにも一とて一とて一とて一とて一とて一とて一
思ひて何とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一
享保元文のうらなも一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一
修女を太夫とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一
形うとて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一
あり太夫の修女とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一
享保の比より太夫ありとて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一

信備羽三を那ををぬきさうしやうしうの后錦補をもて移す
さうしやうしうの近比の扱ふも古来の通うつり水の品もこれ細を床
をのし用ひ金銀の糸入たるはさうしやうしうの摺糸やうのしやうし
免うれさうお此廟の牛一せせの中へくまのまをけりてしやうし
繫きさうのめ其昔し今もさうしやうしうの異形も今其二をい
まの四月をさうしやうしうの賑ひて松の内へ行つるは筆も及ひさうし
へり早春おを家おのむ女も始うさうしやうしうの禮もさうし
いさうしやうしやうしうの衣服もさうしやうしうのさうしやうし
り今もさうしやうしう
蜀山翁の松の内を評して曲中妓着
お不麻縁保者今程さうしやうしう 大黒舞大
神樂人形回し等引さうしやうしうに行つるは形も三月半櫻を植ふ
さうしやうしやうしうの幸酉三月廟中より彩ひ出たりしは牛の所茶

を軒形ふせき虎植の様を牛一置きたきより彩ひたる其
事叶ひさうしやうしうの初る牛の所へ植るは形もさうしやうし
の所へ燈籠をさうしやうしうの享保十三年戊申七月中万宗屋
のむ女平菊の追善に始りて桃灯を牛一たりしは牛を返ひ決
を牛一して今も如くおを形もさうしやうし
玉菊の享保十一年三月九日
身まわし墓におを返ひ決
さうしやうしやうしうの八朔小白袖をさうしやうしうの古来のさうしやうし
を床おの給八朔を白き袴をさうしやうしうの志あるを寛文の始り
所へ宗玉さうしやうしうの娼家の夕西務やうしやうしうの世八朔さうし
お寒くさうしやうしうの時うねり用意やさうしやうしうの白き袴入お袖をさうし
さうしやうしうのすさうしやうしうの徳元さうしやうしうの文也さうしやうし
さうしやうしやうしうの娘入お袖をさうしやうしうの改めすさうしやうし

牛祈りしものを申し一仲の町を祈り行水を今成せり其始、享保十九
 年甲寅の年一丸布福高三位大明神と宮階あり一時の八月
 祭礼の形を今申す起り通比まゝに俄の年、大の日に葉附の年、牛
 祭礼の形を今申す起り、たれまゝに先儀引かしてあり、此祭礼の
 形を今申す起り、たれまゝに先儀引かしてあり、此祭礼の
 形を今申す起り、たれまゝに先儀引かしてあり、此祭礼の
 赤川新磨りたる年、牛行事、大樹園、吉系十二時、祈り
 候せしと思ひ、丸布福、一廟中の社せり、ちり、ちり、あ、人、昔、知、
 ず享保五年の九、鐘、さん、茶、年、子、人、形、し、や、り、天、の、大、年、
 祈り、たれ、まゝ、に、先、儀、引、か、し、て、あり、此、祭、礼、の、形、を、今、申、す、起、り、
 丙午に社女を合せ、二十子、戴百七十四人あり、享和の初、久、三子、五
 三十七人、今、茲、三子、六百、人、さ、り、祀、り、た、り、今、茲、男、藝、者、二十、人、裡、女、
 藝、者、百、年、人、は、や、あ、り、云
 赤川、あ、り、其、始、榮へ、せ、り、日、ま、り、す、の、星、の、盛、り、祈、り、思、ひ、
 ち、り、あ、り、す、り、し、り、水、を、今、の、た、り、あ、り、す、り、祈、り、を、今、の、

志、り、す、り、棟、元、年、汗、す、り、元、足、り、り、り、や、拙、き、事、を、
 形、り、く、た、り、す、り、た、り、す、り、志、り、す、り、事、を、事、を、事、を、事、を、
 里、園、を、水、を、速、き、き、り、あ、り、す、り、元、足、り、り、り、や、拙、き、事、を、
 七、り、す、り、祀、り、す、り、此、里、園、を、祈、り、す、り、吉、系、の、所、事、を、
 明、り、す、り、水、を、祈、り、
 一、百、牛、齒、の、佛、庵、を、祈、り、す、り、訪、ひ、り、す、り、吉、系、の、岡、を、出、り、
 一、岡、後、禊、禊、す、り、水、を、祈、り、す、り、再、び、思、ひ、す、り、水、を、祈、り、す、り、
 吉、系、の、光、景、を、祈、り、す、り、昔、り、今、の、大、木、を、祈、り、す、り、祈、り、す、り、
 見、り、す、り、今、の、一、覽、瞭、然、たり、人、水、吉、系、の、事、務、を、祈、り、す、り、
 爲、り、す、り、水、を、祈、り、す、り、水、を、祈、り、す、り、水、を、祈、り、す、り、
 を、祈、り、す、り、水、を、祈、り、す、り、祈、り、す、り、其、始、を、祈、り、す、り、

具守物志者一かたをそのし出れかれ考へてしつら
其の趣を志つたるまにこそ百中の一見の志あり只志くを
謬多しんを思ふやつらも翁様をよとせしや於て固辞
すれどもゆかり終に當同する所の書と見えたるもの
して志者一法をぬえりおのれ後世にいつたも何し
あゝんを思へく畫者有言大集最雜鬼魅最易や
今世人のまきく行通ゆるものをさるる書籍の
つまに記さるるや嗚呼ねるまに見ん人物を
てよ

文政八年乙酉晚夏十三日

北峰山崎 義成 識

引用書目

異説の引用の書名を悉く記せんが故に
早稲うらやうのうらんをとおし今つら
つら

- 吉原由緒書
- 寫本同房諸圖
- 吉原雜記
- 古今吉原大全
- おらん物誌
- 袖草紙
- 次鳥集
- 横 鏡
- 讚 嘲記
- 色 著論

- 新吉原拵證文
- 同房諸圖
- 青樓雜話
- 山口心牛筆記
- 小歌忍ま
- 大石
- 吉原九鑑
- 金龍山御宇千本櫻
- 青樓年抄
- 江戸名所記

江戸鹿子

増補江戸吐

温故名跡志

江戸志

むきーあふ

玉露業

むりー物産

後々首拍語

俗耳鼓吹

近世事跡合考

江戸物産子大全

繪本江戸土産

再版温故名跡志

浅竹志

南北懐古記

事跡合考

塵塚之形

葦野茗談

我元

瓦礫雜考

牡丹王菊之墳記

^{碑面}是之新吉原角所牛下字原也一牡丹王菊之墓之此妓所

操ありて世を早くせし跡を著く人の志れり正形れを為し

て古守志めをあらはし今も世昔承るて孟茶盆の燈籠王菊の

墓より輝くものあり彼志る一墓不せやものたけり外傳

ひて古とて石をたれぬひり墓名幼渡といひし碑

てかくらひのすまおれ何うなるかゆ字光感寺現存今を承

て言ふ北城はく初に補ひしものを王菊の墓に云はれり

やを蛇山の梅塙文字をせし一は島の佛尾寺に在り

ハ和園系歌といふものなり今又改八年乙酉九月廿五日菊

うらせし目よりしとせし碑ありとせし碑ありとせし碑あり

建る形

碑陰

梅塙膏採玉菊墓得
諸木院尾頭捨賊購
石刻字頗有應募人
今錄所由以饒西捷

縁云奉答言記

新吉原角所中卅屋の拉女玉菊と云ふ一室永の初佳す
こゝ形が願希採のゆえりて自をせり人あるれひて
中元の燈を家こゝけ水調子とて梅塙程を弗及人作
て近薦せしに志ありし也あゝりて何うやておのれらこのお
ち〜日々人の中万字やの構止つらうの近薦の傳りてを物す

事を必怪異の有る形人深之思むるこゝをとおれ却き母の
らめりてむひを耳ききせり所分今をわらたれぬ
世の由たのきまや思へりこゝつら忘れたるをむむ月未隅田
川の雪えんやと舟出せしをさうの万字屋にむし後雪に
たれまのりまもはや借せぬわが卯時の飲酒人〜と形す
やつら河東の傳りての難也一たをむし〜何おもつた中万字
をさつら谷のこゝ心のまを水調子をなす〜何ありと長く
たつら形もこのやと始や終やを志す一弄せしを彼徒が
志り〜こゝやとらうの形〜何おもつた中万字を
つれら〜やとらうの形〜何おもつた中万字を
さつらやとらうの形〜何おもつた中万字を

して侍りたるもあや思ひまじしもの玉菊うまの侍りぬり
ろやや中々新まを異怪の事ありしうらうらとて子
めあつて此に賦つて卒厥堂つて病ひ起つて見たりしこ
しりやとすしめ志るしやを何ぞ得しはる能く思ひたま
しと又形うらうらとて空をよみ月余り伏枕し佛の心より
すうとていふ欠杯中のおりつておれくくもてた例の合用
ちやするし三月大自退院のうまのしり人の技をせしは
を見たりし御子の條下光感寺つて寺のふと玉菊の墓を志
るし京所おれりの考をよみて室永元年甲申三月十九日
死す法名光岸明秀信女とありし此程のふりつて己巳
ハ此の何れの日何れの日も同縁ありし似たりし思ひあはるの目元

十九日正忌やおもひしものめく光感寺に参りて墳墓をたぬ
つめたりしおれつて其懐をたてて那城なりしはつりつ
たしせんと思ひし醫者生師生を崇たて三年たぬぬ人なりし
めりし故より好むる癖つらむのうらおれしとてしりし徳寺より
往て青苔を鮮えりしとてしりしとて見たりし青十九日
あまあれ三月十九日とてしりしとてあま玉菊の母やつてしりし
忌日とてしりし又しりし醫者の幼少童女とてしりしとてしりし
形するしとてしりしとてしりしとてしりしとてしりしとてしりし
を刺し生師生をたぬしりしとてしりしとてしりしとてしりし
其忌辰ハ現住の淨侶衆の送言上人形しりしとてしりしとてしりし
弄せしとてしりし又薨月とてしりしとてしりしとてしりしとてしりし

たれかお水も携へてくるべき形も八百屋若くは家も心ひ
伊藤藩塞の供を設けあり——三法寺又水調子を設せし
居りし月のつらまてお水お水お梅塙のきりぬりぬり
奔起りし石碑のまじはらうしうらや文字うま——は佛
養老人を待てるうらやの風あれぬらぬらお水お水お水
わらわらひつゝ奉養老人の帰らんやする時梅塙

たれかお水も携へてくるべき形も八百屋若くは家も心ひ
伊藤藩塞の供を設けあり——三法寺又水調子を設せし
居りし月のつらまてお水お水お梅塙のきりぬりぬり
奔起りし石碑のまじはらうしうらや文字うま——は佛
養老人を待てるうらやの風あれぬらぬらお水お水お水
わらわらひつゝ奉養老人の帰らんやする時梅塙

奉養せんやする文庫のよもや老人のほふとせう——
尤う——うらやの文庫の妓の追福せうの海をり弄し
たれかお水も携へてくるべき形も八百屋若くは家も心ひ
伊藤藩塞の供を設けあり——三法寺又水調子を設せし
居りし月のつらまてお水お水お梅塙のきりぬりぬり
奔起りし石碑のまじはらうしうらや文字うま——は佛
養老人を待てるうらやの風あれぬらぬらお水お水お水
わらわらひつゝ奉養老人の帰らんやする時梅塙

提女王菊傳

好問堂主人戲編

新吉原角舟中万字屋勘兵衛抱の提女王菊傳
提女王菊傳の提女王菊傳の提女王菊傳
提女王菊傳の提女王菊傳の提女王菊傳
提女王菊傳の提女王菊傳の提女王菊傳

らを忍ぶまゝに流る者若し其のまゝに形を案を船宿にまゐる
 まを常としてんをまゝにゆきまゝにぬるまゝに形を案を船宿に
 祠をまゝにせしむるもあつたし其の玉鬘をほつたし其の
 うを形をまゝにして明をれ琴三條線をしてあつたし其の
 戸扉をまゝにぬる河東扉の三條に括をくまを志をまゝに二
 十のまゝに地別形をまゝにしてまゝにひらきまゝに三月
 のまゝに免をまゝに再の概を伏して三月十九日まゝに享保十年三月
 十九日まゝに推しをまゝにまゝに竟て身まゝにぬる玉鬘は元集
 元禄十五年のまゝに形をまゝに近世奇跡考
 按するまゝに古今吉原大全云正徳年中角町中万字屋に
 玉鬘として全盛のまゝにありまゝに七月の始終に身まゝにぬる
 ぬる北女閨能原のまゝに形をまゝに志をれまゝに上れを認る形を奇
 ねおらむに能く形をまゝに

跡考云享保十二年印本袖字紙玉鬘追善句集まゝにその
 を按するまゝに享保十二年三月十九日身まゝにぬる志を
 寺まゝにまゝに葬るまゝに尋ねるまゝに志をれまゝにまゝに
 して其説是形をまゝに志をれまゝに袖字紙のまゝに
 年の印本として水調子まゝに上り東扉の海まゝに
 此の追善の作らまゝにまゝに其のまゝに其文句に目見
 てひらきまゝに紙のまゝにまゝに三年まゝにまゝに
 三月の追善の作らまゝに志をれまゝに享保十二年
 形をまゝに疑をまゝに又袖字紙の扉に其年の
 三月十九日まゝに形をまゝにまゝに目見をまゝに
 今去追善の案句に三月十九日まゝに志をれまゝに花にまゝに

一歳半之ちをとりて三月十九日忌日形より福すす也
又水調子の又句に九五のあり法ありことありて
る聖典のやつらるる才五歳とて身まゆりたるを
正元節根元集云玉氣と云ふ時病氣付らる
神社佛閣、千度百度祈禱祈念所之の代系
とを下しとて医師を召あらしめしをうけしとて
し形く瘡居をいふ時病氣平一愈ありしを
花と云ふ人の多事一を致す也一や医師申す
聖典申すを考すの月半を又阿東西人の隔信
りし形ありし人なりしと云ふりて内體も
系をとりて日限をせし擲らるる致出せしとて此の家内

女帝想は舞少之仕物一石残接る上りりゆりま
吸おる青本膳もまも半膳ありし一之貴姓群集し
て娘一を言語ありし一か多し一夫ありしとて
時又娘付終るま葉の露と消るせぬ 此後いふ時
死多しとて自死しとていふ世
修められし世に
享保年間酒毒の症具に英を撰とて行われし
二葉とて抄のまもたれり 奇跡
按ずる、奇跡考云新吉原中田原某玉氣とておほひ
一葉まつしとていふを今も我も甲かちや
如く黒天新成とてはるる全系とて 玉の如き故
をひたりし是の考を撰と用ひたりしとて

一歳也之ちをとりて三月十九日忌日形より福やす也
又水調子の文句に才五寸のあり法中こころとちてまを
る聖氣のやつらるる才五歳とて身まゆらたををいつる
に元節根元集云玉氣をたゆら時病氣舟より
神社佛閣、千度百度祈禱祈念所之の代糸
とを下へて一と医師を名あるらるをうけしと透
し形く瘡治をいつる時病氣平一愈ありと四
花とるんもんの病事一を治す事一と医師申す
聖氣甲のを考するの月半支^阿東西人の隔信は
その中形ゆす人度りしとれよりて内體之も此を
系たつて日限をを欠擲との致出せしと此の家内

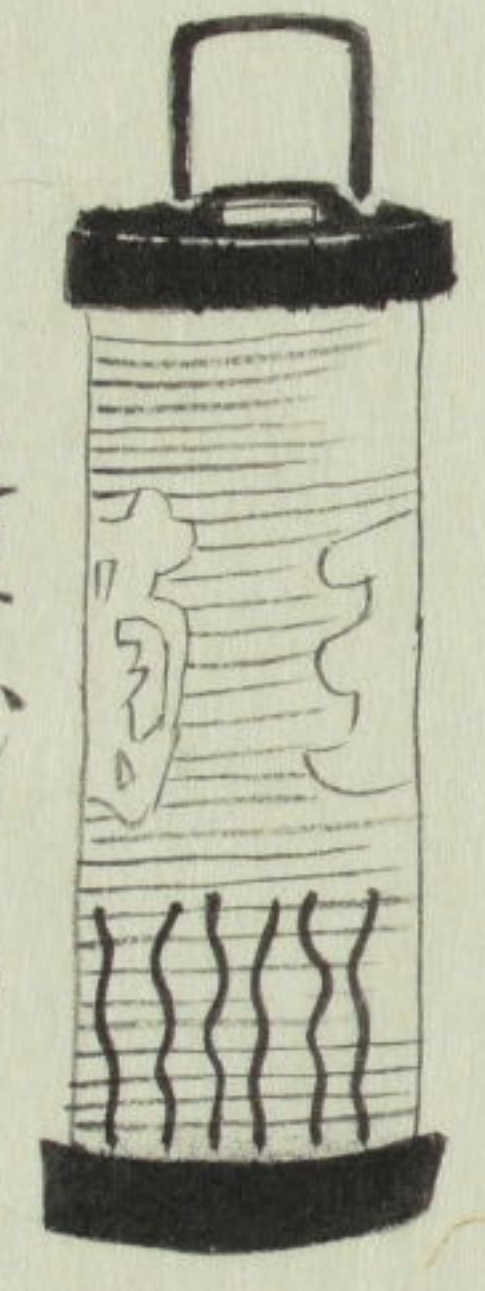
女帝想は蘇りて仕物く石残接るる上よりゆりまき人、
吸物石青本膳まきも牛鬘をありしと貴族翁集し
て紙く言言語のをか多く夫よりゆり才五寸の
時又煩付終る事昔の病を消しせぬ 此後より時カニ
修められしと云ふ 修められしと云ふ
享保多間酒宴の病身と云ふお撰と云ふ行われしと云ふ
と氣と云ふお撰と云ふ 奇跡
按ずる、奇跡考云お吉原や田原某玉氣のちおほひ
一巻まつりしと云ふお吉原のを今もお吉原甲のちおほひ
如く黒天お撰と云ふお吉原の全象と云ふ お吉原の全象と云ふ
をぬひたり是の書お撰と云ふお吉原の全象と云ふ

画欠

享保十三年七月孟蘭盆に唐中より玉菊、三國志の
 孟昭れを其追善をいふ形まんと仲の家をてとらん
 を新小斗とて其時十寸見蘭洲の水調子とて下河原所
 の唄ひらのを布夫人に作らまへて揚を所形を三座を
 き何深やつららの家を追善のまを形とて抄のつれに
 如等をし始其かの人とし出れり為に追善の發句を日向形と
 志ををさうすんて水調子をいふ人席跡を三人冊を
 しと木しと袖袂と題せし今まれり存すさて此時とて
 七んを井とたしし今も燈籠の形とてそまらるる
 揚る水調子の文句とてそまらるる玉菊の光りから
 りの形の形ゆり本末等の唱りあきらふとてすへき

袖袂
青梅雜話

柳打をさうらるるは云とてさあ、まき青梅雜話云元
 文元年七月半萬字堂玉菊の追善の度半の
 所系をの家々の新、集てとらんす抄へたり巻を
 黒の糸を附らるるを附形とてんらるる



翌年よりきりし燈籠の形とて又まらり燈籠の形
 形を調包とて今も大ゆらり形ゆらり形ゆらり
 又北女關起原に破笠とて袖子入りてり燈籠を又と
 出せりりて年々玉を綴る人を感歎さすりて
 たり方口の糸を松を唐花研や云らの見丸の

群来多を見之門、増をゆき借ひたり。是又抄の
 始欠形くとし、其云傳、方桑句、ささりろく、形平
 五、第々来多し、さつろ、明和五年の刊本、俳諧、龍
 おもて、東條萬立、さつろ、点者、の、調句、さつ平句、形
 六、大同、元、出、つろ、さ、水調子、さつ、方、形、を、作
 七、蘭洲、と、云、者、は、江戸、町、目、つろ、若、を、云、
 八、さつ、ろ、の、形、は、傳、り、形、く、ゆ、又、人、の、岩、本、乾、汁
 九、さつ、ろ、能、傳、師、の、ゆ、夫、人、の、其、事、を、
奇蹟考、の、せ、た、り
引、用、志、さ、つ、ろ、を、作、り、し、る、事、を、お、も、て、さ、さ、り、
こ、あ、り、く、さつ、ろ、を、作、り、し、る、事、を、お、も、て、さ、さ、り、
は、東、條、の、文、あ、ま、り、作、れ、り、抄、の、五、の、も、さ、つ、ろ、を、お、も、て、さ、さ、り、
十、寸、尺、の、さ、つ、ろ、を、お、も、て、さ、さ、り、
引、用、志、さ、つ、ろ、を、作、り、し、る、事、を、お、も、て、さ、さ、り、
こ、あ、り、く、さつ、ろ、を、作、り、し、る、事、を、お、も、て、さ、さ、り、

水調子を作り、さつろ、形、を、云、水調子、摺、お、の、事、
 者、は、若、を、蘭、洲、半、切、本、に、此、蘭、洲、の、事、を、表、紙、の
 菊、の、繪、を、中、お、の、事、七、三、の、形、


江尻丈
三味線
西丈
早、中、平、次
山、本、東、齋
山、本、定、右、衛、門
山、本、定、右、衛、門
三、味、線、四、郎、琴、上、村、丈、次、郎



昔程所^{増上寺末}白龍山光感寺^{淨土}宗形^{法名}位

まむ^玉形^神形^神形^神

按する光感寺は法名岩岸明秀信女室永元年
五月十九日有墓碑を玉菊^{玉菊}事形^{玉菊}室本寺
ついで形^{玉菊}形^{玉菊}形^{玉菊}形^{玉菊}形^{玉菊}形^{玉菊}
万二千^{玉菊}年^{玉菊}月^{玉菊}日^{玉菊}も^{玉菊}つ^{玉菊}く^{玉菊}遠^{玉菊}へ^{玉菊}奔^{玉菊}跡^{玉菊}考^{玉菊}正^{玉菊}
尋^{玉菊}元^{玉菊}室^{玉菊}志^{玉菊}水^{玉菊}の^{玉菊}一^{玉菊}室^{玉菊}の^{玉菊}一^{玉菊}室^{玉菊}
さて此室永元年の石碑を玉菊形^{玉菊}室^{玉菊}の^{玉菊}一^{玉菊}室^{玉菊}
初^{玉菊}元^{玉菊}室^{玉菊}志^{玉菊}水^{玉菊}の^{玉菊}一^{玉菊}室^{玉菊}の^{玉菊}一^{玉菊}室^{玉菊}
の形^{玉菊}光^{玉菊}感^{玉菊}寺^{玉菊}へ^{玉菊}再^{玉菊}之^{玉菊}形^{玉菊}玉^{玉菊}菊^{玉菊}墓^{玉菊}所^{玉菊}を^{玉菊}た^{玉菊}す^{玉菊}お^{玉菊}う^{玉菊}そ^{玉菊}
う^{玉菊}つ^{玉菊}て^{玉菊}志^{玉菊}ま^{玉菊}ぎ^{玉菊}う^{玉菊}た^{玉菊}れ^{玉菊}を^{玉菊}信^{玉菊}信^{玉菊}の^{玉菊}形^{玉菊}新^{玉菊}ま^{玉菊}り^{玉菊}う^{玉菊}ら^{玉菊}に^{玉菊}後^{玉菊}日^{玉菊}

波寺^{玉菊}の^{玉菊}使^{玉菊}務^{玉菊}を^{玉菊}以^{玉菊}て^{玉菊}申^{玉菊}一^{玉菊}お^{玉菊}ま^{玉菊}せ^{玉菊}一^{玉菊}お^{玉菊}う^{玉菊}の^{玉菊}玉^{玉菊}菊^{玉菊}
墓^{玉菊}所^{玉菊}見^{玉菊}出^{玉菊}一^{玉菊}た^{玉菊}り^{玉菊}と^{玉菊}て^{玉菊}岩^{玉菊}岸^{玉菊}明^{玉菊}秀^{玉菊}信^{玉菊}女^{玉菊}
う^{玉菊}ら^{玉菊}う^{玉菊}ら^{玉菊}の^{玉菊}香^{玉菊}の^{玉菊}墓^{玉菊}と^{玉菊}て^{玉菊}幼^{玉菊}渡^{玉菊}童^{玉菊}女^{玉菊}と^{玉菊}ま^{玉菊}て^{玉菊}者^{玉菊}を^{玉菊}去^{玉菊}
面^{玉菊}の^{玉菊}告^{玉菊}末^{玉菊}と^{玉菊}れ^{玉菊}を^{玉菊}其^{玉菊}年^{玉菊}月^{玉菊}日^{玉菊}の^{玉菊}お^{玉菊}遠^{玉菊}何^{玉菊}を^{玉菊}見^{玉菊}て^{玉菊}
按^{玉菊}の^{玉菊}ま^{玉菊}り^{玉菊}お^{玉菊}す^{玉菊}ま^{玉菊}り^{玉菊}た^{玉菊}り^{玉菊}と^{玉菊}て^{玉菊}志^{玉菊}の^{玉菊}ま^{玉菊}り^{玉菊}を^{玉菊}今^{玉菊}う^{玉菊}
彼^{玉菊}寺^{玉菊}の^{玉菊}ま^{玉菊}り^{玉菊}右^{玉菊}の^{玉菊}墓^{玉菊}と^{玉菊}て^{玉菊}玉^{玉菊}菊^{玉菊}の^{玉菊}ま^{玉菊}り^{玉菊}を^{玉菊}い^{玉菊}ひ^{玉菊}信^{玉菊}女^{玉菊}
見^{玉菊}ま^{玉菊}り^{玉菊}お^{玉菊}ま^{玉菊}り^{玉菊}明^{玉菊}和^{玉菊}九^{玉菊}年^{玉菊}の^{玉菊}火^{玉菊}災^{玉菊}と^{玉菊}あ^{玉菊}ら^{玉菊}お^{玉菊}ま^{玉菊}り^{玉菊}
形^{玉菊}と^{玉菊}形^{玉菊}を^{玉菊}や^{玉菊}ら^{玉菊}ん^{玉菊}を^{玉菊}寺^{玉菊}の^{玉菊}ま^{玉菊}り^{玉菊}と^{玉菊}て^{玉菊}志^{玉菊}の^{玉菊}ま^{玉菊}り^{玉菊}を^{玉菊}音^{玉菊}花^{玉菊}を^{玉菊}
向^{玉菊}ら^{玉菊}ら^{玉菊}の^{玉菊}ま^{玉菊}り^{玉菊}と^{玉菊}志^{玉菊}の^{玉菊}ま^{玉菊}り^{玉菊}を^{玉菊}い^{玉菊}ひ^{玉菊}一^{玉菊}形^{玉菊}と^{玉菊}て^{玉菊}
今^{玉菊}茲^{玉菊}と^{玉菊}月^{玉菊}友^{玉菊}人^{玉菊}梅^{玉菊}鳩^{玉菊}の^{玉菊}在^{玉菊}女^{玉菊}玉^{玉菊}菊^{玉菊}の^{玉菊}墓^{玉菊}と^{玉菊}て^{玉菊}
再^{玉菊}身^{玉菊}あ^{玉菊}ら^{玉菊}に^{玉菊}佛^{玉菊}尾^{玉菊}翁^{玉菊}の^{玉菊}墓^{玉菊}を^{玉菊}原^{玉菊}甚^{玉菊}と^{玉菊}存^{玉菊}と^{玉菊}て^{玉菊}分^{玉菊}

ら水守さる事有らる事也知るに母とて死く生高の
尾防の御しし小菰ののりたる人ありて其碑
文の撮本をとりて予時よりして予よりして其
事跡をた水守集免記しある事の有らる事
一を菰子の事記形んせらる具其所一を促さる
月を形て搜り出て給る今此記事小附して
参考小備ふ事也

乙酉五月十三日

好問堂主人識

遊女玉菰考

新吉原角所中下字屋敷兵衛抱の遊女玉菰考

あり客類のさるる其性質も有る情もあはる其
所全盛なりふりて死く其敬ありて其考者若者
をいふ事し茶を船宿にむきて常の心をさるる行届
のぬきも死く初んたりて初形もさるる志も志も
此玉菰の愛情も死てさるる死のぬきも死て明
く此死を玉菰をもて抄法強はるる命を深くぬき
ありて玉菰の情もさるる志も死て死て死て死
例形も死て死て死て死て死て死て死て死て死
て死て死て死て死て死て死て死て死て死て死
玉菰考はるる考元集
近世奇跡考

吉原大至北女関紀原考の正徳年中玉菰身考

しよしを記すハ甚禊形ノ袖字紙を預す也し
袖字紙序^{人竹婦}云身の上ノ程風をちや玉糸の比ハ形ノ空
光陰ヲ柳行ノ教句ノ追尋を魁一形をちやまて茶を
の部をちやめすハ三子ノ柳慕の法也然ち方々一甚言の
三月十九日此自ノ形をちやまて目如やま

按すハ柳行ノ教句ノ追尋善を魁一形をちやまて
茶店ノ部ノちやめすハ今茲三國志形を
もて衆句を魁セ一柳行をちやまて(玉糸)
消云揚を所ね八金唐方ニ青むハ柳行ニむ
衆句をちやめ馬馴馬の形若自むくハ中夜をて此
追尋をちやまて今茲今日燈籠ノ權譽少者

りたる形の上ニ柱女を先立形ハあかんハ向の
衆句多めをちやまてすハ中調子の長ハもハ
序跋を序へて冊子也形一たハ此袖字紙形ノ
さて燈籠の形ハ中調子の如く形一ハ青袴雜
話ハつらものハ享保十三年七月孟蘭盆ノ廟中
のちのちハ玉糸ノ三國志ノ追尋ハ形ハ人ハ仲の
所ノちやまて柳行を序ハ出ハたハ柳の時十寸身
廿四冊^{つらもの}ハ水調子也ハ河東ノハ鳴也
のち竹婦人^{竹婦人ハ辨語点者山若本輕什と云}
たハ作し免揚のハハ免免ハ三條御司ハ河東也
つらもの家ノ追尋のハハを形一たハその時茶を

中、其菊をいふを「いふれをいふあるは、いふれく家」
 あり、柳打をいふを「いふれをいふ其居元又元年ハハハ」
 「いふれをいふ人青黒の菊をいふれをいふ」
 「いふれをいふ聖年よりきつ、其禮氣よりいふ」
 花形を作り出、修身に因む、て華美なり、
 乃て之なり

以上青楼雜話に於て
切き及えたるをいふ



青楼雜
 話所載

北女問能原云燈籠の權輿、云、其菊、追善が、起

一寸五分

此世の徳と志と不徳と、聖賢の世とあり、何れの中、何れをいふも
 の中、いふも、徳と志と不徳と、故に、後、の聖賢の世とあり、
 う追善が、茶をいふ、柳打をいふ、て、軒、いふ、其、我
 行、赤、青、の、三、菊、を、いふ、其、柳、打、を、いふ、其、我
 柳、打、を、いふ、其、柳、打、を、いふ、其、我、柳、打、を、いふ、其、我
 花、を、又、いふ、其、柳、打、を、いふ、其、我、柳、打、を、いふ、其、我
 其、柳、打、を、いふ、其、柳、打、を、いふ、其、我、柳、打、を、いふ、其、我
 其、柳、打、を、いふ、其、柳、打、を、いふ、其、我、柳、打、を、いふ、其、我
 其、柳、打、を、いふ、其、柳、打、を、いふ、其、我、柳、打、を、いふ、其、我

新いなるを法在墓新碑お此と尋ねられしに申す
 けり寺傍にありぬる大神宮の園をくわむ
 一の碑を玉川墓や定むりて傍形の一碑を先
 の墓やと桐屋へ先おしられし年月の法在
 一をまじ其後ふたりたしをさしれを墓下を
 せし法在とふつてさるをいせはし形をさる
 可又ある人の考せしきるる香供養の久く是
 符妙雲の四字とて大く書たる玉川法在の文字
 をまじ久を形せるものありしをいれしを後
 して撰つてくわ我おたれをたれの久人を
 墓とす

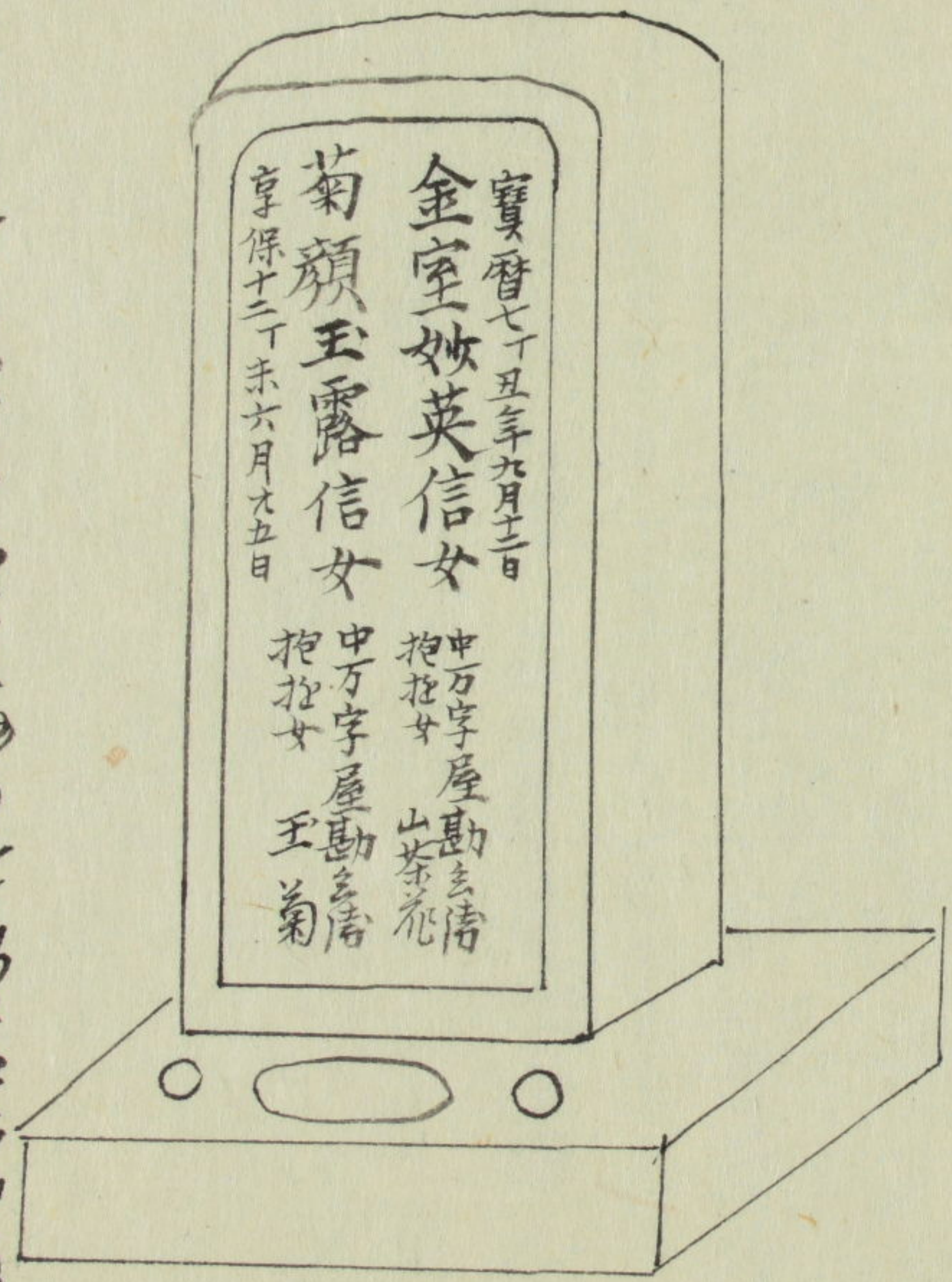
のうをちをちりすてしやく覚悟の古あり
 あり果一切をせし家とてすや美福の神の意
 をおしめしめありの妙あり持根をむきたる
 一而ふけしり一うの宿るやせの中しすらし
 家をたれ九不道居ふも我せんをせし

形と思や香供養の書体すつてと大なる文字の
 方を見れを子母體形をいふものありおむむき書
 小をいふるもおむむき

御子
 新堀とて柳屋山原見寺禪宗に玉川墓あり今茲而
 圓忌よりして氣方原ありて追善ありて年々茶屋の形子の
 ことせしを今茲の娼家も細工の燈籠を掛つて

まことの向う盤向あまをさすを袖子紙を再刻し抄の末に
 抄へて其末にも羽切をせしむる形にあらん人のもまも
 掃くしあはれしや誰か思ふ起すしをいふに己のいふを袖
 子紙の末に自墓下りてる形なるを永見するに葬りし何れ
 吾等遊宮を再刻ししをいふに抄の末に志の紙に吾等在るを
 傳へ抄の末に志の紙に似たりしをいふに何れ何れを
 印せしむる抄の末に似たりしをいふに何れ何れをいふに
 水言ひも葬地の異形なるを袖子紙の末に吾等なるを
 論するに及ぶ

永見寺墓碑圖



此碑を去る年の大災につきておろを新とすにあらん
 りしを羽切せしむるに文化三年の大災に罹りて

あ———石碑いそあ———く見ぬ

水調子 竹婦人作 玉蘭の文句は法をたすけおのふらん松
志重いふらうしむ志のそまをせむらぬふたうむむふ
あそそを同じしむむらうのんらふとをくまをくまを
つてつふと言葉を志くふれを照さくふの玉の福もた五
らんあうつきことあんきゆ万玉蘭の若くすむらぬん
の形ゆる本末空の唱まうらふ空をさすあそそ抑打もや
うあしつらうまたらすあゆまうせを揮のまらうあそ
あそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭
抑打もやあそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭
あそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭
袖を舞の句い

菊さくく小法師の日はあそそ———川あそそく南うあそ
あそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭
あそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭
あそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭
あそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭
あそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭
あそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭

本末空のあゆまうらうしむ志のふけさらん万玉蘭
あそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭
あそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭
あそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭
あそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭
あそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭
あそそ志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭

せり———伊小法師志重いふらうしむ志のふけさらん万玉蘭

1777 畫形


江ノ太夫
三味線
河太夫
山表源也布
只
山崎東
山崎東
上村久次布



此水調子印本の表紙形、筆者つらきを蘭洲三丁目
 寸名、表紙の傍に中おの長七三形、玉菊、追々、
 古きき、小河、あ、のき、を、作、ま、あ、て、の、印、
 玉菊、常、河、あ、を、あ、て、あ、て、三、法、を、い、ま、あ、て、
 せ、を、あ、て、形、に、あ、て、あ、て、あ、て、二十、歳、の、あ、
 病、氣、つ、ま、あ、て、神、社、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 所、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 中、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 何、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 師、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 人、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

二年早水子

龍澤堂公雨所蔵



海人一石也

| | | | |
|---|---|---|---|
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |

寛延三年

龍澤堂公雨所蔵



ま

| | | | |
|---|---|---|---|
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |

古写保十九箇年

龍澤堂公雨所蔵



新 中万字

| | | | |
|---|---|---|---|
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |

南風所蔵



| | | | |
|---|---|---|---|
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |
| 夕 | カ | 万 | と |

寶曆四年

南畝所藏



| | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| 夕まき | 夕まき | 夕まき | 夕まき |
| 夕まき | 夕まき | 夕まき | 夕まき |
| 夕まき | 夕まき | 夕まき | 夕まき |
| 夕まき | 夕まき | 夕まき | 夕まき |
| 夕まき | 夕まき | 夕まき | 夕まき |
| 夕まき | 夕まき | 夕まき | 夕まき |
| 夕まき | 夕まき | 夕まき | 夕まき |
| 夕まき | 夕まき | 夕まき | 夕まき |

辛巳 不祥

南所 花切之部

南畝所藏



| | | | |
|----|----|----|----|
| 花切 | 花切 | 花切 | 花切 |
| 花切 | 花切 | 花切 | 花切 |
| 花切 | 花切 | 花切 | 花切 |
| 花切 | 花切 | 花切 | 花切 |
| 花切 | 花切 | 花切 | 花切 |
| 花切 | 花切 | 花切 | 花切 |
| 花切 | 花切 | 花切 | 花切 |
| 花切 | 花切 | 花切 | 花切 |

明和五戊子年 南畝所藏



| | | | |
|---|---|---|---|
| 初 | 初 | 初 | 初 |
| 初 | 初 | 初 | 初 |
| 初 | 初 | 初 | 初 |
| 初 | 初 | 初 | 初 |
| 初 | 初 | 初 | 初 |
| 初 | 初 | 初 | 初 |
| 初 | 初 | 初 | 初 |
| 初 | 初 | 初 | 初 |

享保あり、明和より、大約五十年、其名所代あり、如許、
らう、高雄、をく世、居、娘、ふ、あり、され、初、代の、世、成、え、て

甚後存あるものもたへて形

附録 二條


水調子小形きりうれ葉の存ありて鏡のうらみ強からん

按さう小近世奇跡考云鏡のつへ不揃の葉をいさう玉
の葉をいさう玉をいさう水調子の文を証
せしむるに柳亭主人云鏡小柳の葉をいさう
玉をいさう始終形とて小奇譚形 寛永十三年松
江頼撰俳諧をいさう者書の部也

たこの葉を柳小とありぬの鏡之形 宗房

鏡小柳の葉を用ら如く鏡餅の志この葉を
用らやして勺意形 寛永以前古やうの葉は

りしをとりしあり 鏡小南天を用やうを難轉
の音とせきやう風波の志たまるを形きる望しを例
の存詮ありて形へのありてを以て視せしやう或は風
止水如鏡形とて古待有 其意をうりて好
者の志を 兎一こまや

近世奇跡考云享保中酒をよりのむ者奉相撲とて事
をいさうしむるやうに玉菊のつをいさうせし
り一形古系小田系を某玉菊のつをいさうし
てつものをいさうし甲うけと云らぬ乃如く黒紙考
鏡ありはらう 金糸ありて  玉うらこの葉をいさう
たり是の葉をいさうしむるはあやむ形とて

正真砂云奈良を爲衣高の神代高氣位高なる
 活形乃故名代の兼持何より見違へ吉原入込又々
 現所葛原所入吉原より移すに拉び小長一吉原を
 牛万字を平菊小通して吉原をぬき平菊に大橋より病
 氣甘く此より移す一を爲衣高情カを記一療治申付
 し、終り病死しぬられを之祖の伝承海やり所之名題
 を定所やつて今如く耳より伝へるなり其時加賀を圃
 皇小形一とて佳山にて名をおろんやう一語句如く此後高
和上り等のあつてさういふ所傳ゆぬの二階あり
存月の傳又日侍の事かきくを考へる也
 按り此系より傳り馴原一平菊に代目より平菊子
 や光盛寺に葬りし平菊初代形一とされ二代目

形一なる奈良茂を乃々稱すも其名元元は元
享保十九年四月五日 元々元元を形一と爲し全盛を
所より高在傳性齋也
 元々元元一この形れを享保の中年に當りり
 且厚勲をさすも此婦人お寺後内の薛世の
作りの室曆九年 傳して元祖の河東享保三年小
二月七日没す
たてりそのころ 一つも此享保の初めすむし
半ち入りキ形
 此の時を永見寺の平菊の奈良茂を馴原一
 平菊形なる一兩巴危言享保十年不法を出一山か
 たせし一平菊の如し思入り奈良茂を卒年を
 考へおの紀文没年の初年形れをりぬ又元元法
 やら拉び一奈良茂といひ大寺蘇とせりその所の
大寺の奈良

良辰の暮りてやし夜より我町にハククハククハクク
 加賀守の名を傳へる君さまを神の是を身後すか 己も傳へ
 が客のうし見ぬまをさうし 享保七年八月廿五日
 形し 玉菊ハククハククハククハククハククハククハクク
 光威ら玉菊ハククハククハククハククハククハククハクク
 定つぬれやうれ神代形の時を永く是寺の玉菊
 うふ常良辰ハククハククハククハククハククハククハクク
 具く玉鹿のさうらの又向を益の君をいれて玉菊の
 怒きをのみむね作らぬれを玉菊ハククハククハククハクク
 玉 猶郭通の者をさうし

丁亥六月廿五日

